

T 02
N 69
8

日本における統計学の発展

第 8 卷

夫 一 津 島 手 し 話

喜 重 平 西 手 き 聞



1981年1月28日(水)

立教大学心理学研究室にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行 (* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

西平 初めに、これは、主として統計学関係の人たちの目に触れるものですから、島津一夫さんをご存じない方も多いと思いますので、大学を出られた年を教えてください。

島津 大学を出たのは昭和13年です。当時、東大に航空研究所というのがありました。いまの宇宙航空研究所の前身です。すぐそこに入りました。そこでやったのは、高高度飛行、成層圏飛行の人体に及ぼす影響の心理学的対策ということなんです。何をやったかといいますと、長時間、気密室の中に入っていろいろ作業をやらせて、その作業が、高度によってどう変わるかということを見る。そんなことが中心です。それを大体昭和16年まで、まる3年間やりました。それから陸軍に行きました。陸軍は当時、陸軍省、参謀本部、教育総監部という3つの柱があったんです。教育総監部というのは、陸軍の教育を扱うところなんです。そこで軍隊心理の研究をしました。

ここには、ご存じの梅津ハ三さんと、そのほかにもう1人心理学関係の人がおられました。3人で軍隊心理の研究をしていたわけです。だから、敗戦感の心理がどうか、そんなふうのことの作文もしました。

そういう作文を一方の手でやって、もう一方の手で少年兵の適性検査、たとえば、飛行機を落とすために眼鏡でねらう少年防空兵の適性、潜水艦を見つけ出すのにやっぱり少年兵を使う。それをどういうふうにやって適性を選ぶかとか、大砲を撃つ場合にどういうのがうまく命中させるとか、そんなことをやっていたわけです。

終戦近くに、陸軍にだんだんそういうことまでしている余裕がなくなっただけでしょう。そこを縮小するというので、私は、陸軍の航空の方に航空適性検査部というのがあって、そこへ行きました。行ってすぐ終戦になりましたから、そこでは全然仕事をしていない。まあ、そういうことです。

終戦後しばらくして、教育研修所へ入ってリテラシーをやることになり、リテラシーが終わって、研究所で1〜2年遊んでいました。それから、横浜市大へ出て、博士課程ができるというのでその要員として立教へ来て、立教で定年を迎えました。現在は、ご承知のとおり大東文化大学というわけです。

そこで本論に入りますが、私が大学に入ったのが昭和10年なんです。ですから、それぐらいから戦前の、ことに統計に関して申します。当時、東大の心理学というのはゲシュタルト心理学の全盛時代だったわけです。ですから、心理学というと、ゲシュタルト以外のことをやっている者は非常に少ないありさまでした。

ゲシュタルト心理学的な研究というのは、内容的に見ますと、実験事例をたくさん集めて、そこから規則性みたいなものを見つけ出すとか、法則を立てるというようなことじゃなくて、大数の法則の否定なんです。少数に意味を持たせるといことが、中心的な考え方の1つだ。たんですね。ですから、紙と鉛筆で多人数を一斉に検査するテストなんてことは意味をなさない。テストは大数の法則を基準にしているんで、あれは役に立たない、そういう考え方が中心だったわけです。そういうことで、

いまだにテストを軽視する面があります。したがって統計といいますと、そういうテスト関係での統計には全然触れませんでしたし、そういう余裕もなかったわけです。

統計的な方法が心理学の上で、自分の関係で使われたのは、実験心理学なんですね。心理学でいろいろな実験をやりますね。実験法の1つとしての精神物理的測定法というのは、種類は幾つかあります。いずれにしても、その中で分布を見たり、平均を出したり、いまですと黙っていても標準偏差を出しますが、当時は標準偏差じゃなくて平均錯差なんですよ。そういうものを出すということ、一般の心理学の初歩実験で触れたくらいです。

ですから、私自身からいうと、大学の3年間では、統計的なことにはほとんど触れなかったといっていると思うんです。触れたのは、実験法で結果の処理としての統計だったわけです。だから、記述統計学みたいなものだけで済ませてきたわけです。それしかなかったわけです。

ところが、東大は、というか学会はといってもいいと思いますが、そういう風潮だったんです。にもかかわらず、テストをやっている偉い方がおられました。たとえば、東京文理大の田中寛一先生、「田中B式」なんていう知能検査がありますね。田中先生が、当時でもずいぶんテストをおやりになっていました。「東洋民族の知能の比較」なんていうのは、田中先生の大きな仕事だと思っんです。そういうことで、田中先生を存じ上げたんです。

もう1つ、1937年ですから、これは昭和12年ぐらいかな、田中先生の「教育測定法」という本が出まして、これは、私たちは、ほとんどそういう本を見る機会はなか

っただけですけども、パラパラとは見ました。それが、統計のまとまった本に触れる第1歩でしたね。

それから、実験心理学で統計の話が出たときに、高木貞二先生が触れたのは、当時の京城大学の上田常吉先生の「生物統計学」という本でした。そういうことが印象的だったですね。

田中先生に続いて申しますと、古賀行義先生、もうどちらも故人ですけども、広島文理大で相関係数とか因子分析とかを私の印象では非常に熱心に1人でやっておられたですね。戦後、1951年に岩波から「実験心理学提要」という本が出ました。この中に「統計法」という名でまとめてあるんですよ。そんなことでしたね。もうお一人、日本大学に渡辺徹先生という方がおられました。この方も亡くなりましたが、知能検査なんか非常に関心を持ってやっておられたですね。

戦前、学生時代、その後の仕事をしていたとき、統計的なことで考えたのは、その程度のことですね。ですから、記述統計もいいところで、全くその初歩をやったということですね。これは私の個人的な経験でもあるし、おそらく大方の心理学者が、そういうことじゃなかったかといってもいいと思うんです。戦前はそんなものですね。

西平 東大の方では入学試験に関連して、たとえば、文理大は高等師範だったから、佐藤良一郎先生なんかは、そういう問題から入っていらっしゃったみたいですけども、あまりそういうことは……。

島津 全然ありませんでした。というのは、文学部なんか入学試験のない学科もありましたから。(笑) いまです

と、入学試験の問題をつくるときとか、後の処理とか、そういうことに必ず統計的な方法が考えられます。当時はそんなことは何もなかったですね。ですから統計と関連して自分のやったこと、受けてきた教育で考えますと、そんなことじゃないかと思います。これは全く私の印象ですけれども。

後でまたお尋ねくだされば申し上げるとして、今度は戦争中のことですが、戦争中では、心理学全般について申しますと、要するに、陸海軍に、文官として、技師、教授として行ったり、武官として将校になったりした人が大ぜいいました。たとえば、海軍では、海軍技術研究所。あそこで兼子宙さんが中心で技師だったんです。その下に技師として心理学の人がいました。それから海軍に志願した将校、中尉や少尉の人たちが集まって、実験心理部といいましたが、そこでテストの研究をしていました。そのとき海軍では、先ほど申しました分布とか、平均とか、平均錯差という簡単なことばかりでなく、もう少し進んだ統計をやっていたかもしれません。

軍部でやっていたことは、知能検査、適性検査、性格検査の実施が、心理学者の主な仕事なんです。海軍では、そのほかに、航空隊、当時の霞ヶ浦航空隊、後の土浦航空隊、それから横須賀の海軍航空廠というところがありました。そこに若干心理学者がいました。これもやはりテストです。テストの研究じゃなくて、テストを繰り返してやっているという状態でした。

西平　そういうところのテストは、フリッカーとか……。

島津　知能検査でいいますと、田中B式、そのまま使っ

たり、多少モディファイして使ったり、それから適性検査でいいますと、フリッカーなど含めて、機械器具を使うやつが多少ありました。これは自分のところでつくりましたが、つくるについて統計的な細かい検討などなく、適当につくられたわけですね。

性格検査というのは、もうありきたりのもの、内田クレペリンとか、そういうふうなものを、たくさんの志願兵や入隊してくる者にやっていたのが、陸海軍の状況ですね。ですから、テストをどのようにつくるか、どのように分析するか、要因をどういうふうに相関をとるかというようなことは、テストの実施に追われて、ほとんどやっていなかったといっていると思います。

これは、私事になりますが、終戦の前の1944年に、岩波から、これはご承知だと思いますが、近藤忠雄さんの「計数の統計学」という本が出たんです。こんな薄いペーパーバウンドの本でした。それを買ってきて、梅津さんを中心に2〜3人で研究会をやったことがあるんです。それで、 χ^2 の存在というのを知ったんです。これはいいもんだってわけで、あの本ですいぶん勉強しました。それで初めて、いままでの統計と違うんだなということを知りました。

それじゃ大学ではどうしていたか。ところが、大学は戦争中、学生がいなくなっちゃったわけですね。ですから、教育はほとんどできなかったんじゃないかと思うんです。これは外側から見ていた印象ですけどもね。高木先生なんかは、アメリカの心理学の動向を、戦争中かなり注目されていたような気配が、いまになるとあったと思うんです。

戦争中は私たちは、統計の方とはもちろん連絡もなかったし、新しい統計的な方法ということも考えられなかったんです。ただ、こういうことがありました。将校の中に統計をやった人がいるわけで、そういう人たちにいろいろ教えてもらったことがありました。

先ほどお話ししたように、海軍技術研究所では、新しい統計ということについて、2~3の人は個人的に勉強していたのではないかと思われる節もありました。戦争中の思い当たることだけ申したんですが、そんなことですな。

西平 さっきのお話の、内田クレペリンの内田さんという方はどういう……。

島津 内田勇三郎さんというのは、東大を出て、大正12年ぐらいだと思いますが、早稲田へ長らく行っていました。早稲田にいたときに、クレペリンの検査を日本化して自分の名前をつけて——あの1けたの数字を足すやつあるでしょう、あれをやりました。あのテストはずいぶん使われました。いまでも盛んに使われていますが、あれは解釈が非常にむずかしいんです。

西平 祖師谷にあった労働科学研究所なんかは……。

島津 あれは、戦争前から地道な研究をしていたんですよ。瀬川良夫君はあすこにいたんです。戦争前は非常に地道な研究をしていました。戦争中は、あすこはやっぱり人がいなくなっただけじゃないですか。

西平 地道、てどういう……？

島津 疲労の研究とか、作業時間の研究、作業形態の研究とか。桐原先生が中心で、優秀な研究を出していましたね。ああいう研究所が戦後ずっとなら残っていたら……。

残ってはいますけれども、やっぱりカネがないんでしょ
うね。

西平 そういふのは戦前多少でもあるとすると、労働科
学研究所ぐらいのものですか。

島津 あと戦争中では、文部省に体育研究所がありまし
た。戦後、なくなっちゃいました。ここでは心理学の人が、ス
ポーツマンの心理、体育心理をやりました。

戦争のにおいがし始めてから、陸海軍が争ってして、
心理学者を自分の方に採っちゃう。もう一つは傷病軍人
の処遇のための軍事保護院というのができて、軍人保護
に当たる。そこで傷ついた人の職業をどうするかという
んで、心理学の人がずいぶん行きました。

西平 心理学の機関誌では、「心理学研究」なんていうの
はずいぶん古くから出ていたわけでしょう。心理学会の
雑誌。

島津 雑誌はいろいろ名前が変わりました。昭和二年か
ら「心理学研究」となりました。その前は、「心理研究」
とかいろんな名前でした。城戸幡太郎先生の関係で岩波
が初めのうち引き受けていたんですよ。城戸先生が編集
主任で、ほとんどの世話をされていたわけです。その後、
岩波から移って学会がやるようになったわけです。

西平 島津さんが東大におられた多少前まで入れて、ど
ういう心理学の先生方がいらしゃいましたか。

島津 ぼくの先生は、民族心理学の桑田先生、それから
千輪先生、高木先生。みんな亡くなりました。ですから、
桑田教授、千輪助教授、高木助教授。城戸先生が講師。
それから北大にいた結城錦一さんが助手、梅津助手、そ
ういう時代だったですね。それから東大の航空研究所に

は嘱託として心理学の最長老の松本亦太郎先生、淡路円治郎先生は助教授で所員。あとは高木實一さんが枝手でした。そのほかに嘱託として狩野広之さん、この人は労働科学研究所へ行きました。それから豊原恒男さん、そんなことでしたね。

西平 アメリカとかドイツの関係雑誌は戦前は来ていたのですか。

島津 外国雑誌は、東大は国内ではともかく一番持っていました。相当ありましたから不便することはありませんでした。いまでも、東大は非常に持っていますね。

西平 そのころ外国では、何かそういうことについての論文はないんですか。

島津 論文はあったことはあったんです。いまに比べれば、数は少なかっただけです。

西平 出始めてはいたわけですか。

島津 ええ。もちろんありました。ところが、さっき申し上げたように、テストに対して不信感を持っているわけです。テストはダメなものと頭から決めてかかっているわけです。だから、テストはもちろん知らないわけですよ。ところが、卒業して陸海軍へ行って何をやるかという、テストをやられるわけですね。そこで、テストはこういうふうにするんだということから始めて、こういうものだってことを勉強したわけです。

ところが、ちょっと古い話に戻りますが、昭和の初め、大正末期はメンタルテスト時代だったことがあるんです。その時代には、先ほど申しませんでした、岡部弥太郎先生とかそういう人たちがかなり活躍しているんですよ。田中先生ももちろんそうですけれども。

西平 岡部さんは東大ですか。

島津 ええ。戦後は教育学部へ行きました。戦前は東大文学部の教育学科の先生かな。

戦前、戦中にかけて申し上げるとすれば、私の知っている範囲ではそんなことですね。

戦後は、さっきちょっと申し上げましたけれど、高木先生は、戦争中にアメリカの心理学の動向をかなりつかんでおられたんじゃないかと思うんです。

西平 高木さんはずっと東大の……。

島津 助教授から教授になりました。戦中は教育がほとんどなか。たから、そういう勉強をされていたんじゃないかと、いまになって思うんです。それはどういうことかというと、アメリカの現代心理学のもとになっているような考え方を勉強されて、戦争中にすでに推測統計学といわれるような方法を、心理学に取り入れなければならないと考えておられたと思うんです。実際にアメリカではそういうことをやっているんだ。また、行動の数理的な解析ということも考えておられた。戦後になって、それをだんだん出されてきたと思うんですね。

その1つの具体的あらわれとして、増山元三郎さんを文学部の方へ講師にお願いしたりして、増山さんの「少数例のまとめ方」の初版が1943年です。あの本が東大の研究室を中心に非常に読まれたのではないかと思うのです。いままでの大数の法則というか、たくさんデータの集めて平均をとってやり方を拒否した。その論理に対してちょうどいいわけですよ。少数例でしょう。これは全く私の勘ぐりですが、自分たちのやっていることの

合理化みたいな面が強くていたと思うんですよ。心理学の方では、ゲシュタルト心理学のK.レヴィンというのが、少数例のことをいうわけなんです。それとうまくマッチして、そういうことを使ったんじゃないかと思うのです。増山さんと当時研究室にいた小笠原慈瑛さん、小川隆君、梅岡義貴君などが座談会をやったことがあるんですよ。

「実験と推計」という名前で1947年に、ある本の中にその座談会の記事が出ているんです。これは新しい統計が心理学に入ってくる一つの契機になったと思うのです。おそらく、そういう関係で統計が入ってきたのは、東大が一番早いんじゃないですか。大学の関係ではそんなふうにして、新しい方法がしみ込んでいったんじゃないかと思いますね。

ところで、われわれ、つまり大学を離れていた者はどうかというと、少数の勉強家は知りませんが、私たちがそういうことにかかわったのは、戦争中は先ほどの近藤さんの本ですが、戦後はやっぱりリテラシーですよ。リテラシーが入ってきたときに、白石一誠さんが委員会のオブザーバーで入ってこられました。あの人は講釈がうまいんで、統計数理研究所でかり版できちんと教材を刷ってこられて、心理学のわれわれ、言語学の柴田、北村、野元さんたち社会学の馬場四郎さんなどが集まって、毎週/回昼休みに講義をしてくれました。それが、かれこれ10回以上続きました。それで大体のアウトラインを勉強しました。白石さんは講義が上手なんで、大変有益でした。

それと同時に、林知己夫さんを初めとして、統計の皆さんと一緒にテストをつくったわけです。あのときに、

林さんやあなた方皆さんと一緒にやっていて、とにかく実践的に統計的な方法の使い方ということ、心理学の連中は会得したと思うんです。サンプリングはこうやるんだ、テストをつくるとき、分析のときにはこういう方法で比較したらいい、フリテストをやったら、後の整理は分布と平均だけじゃダメなんだ。こういうふうにとっておくと、その次の解析に役立つとか、具体的にはそういうことを皆さんから教えてもらったと思うんです。たとえば、ガットマンの尺度解析の方法をテスト結果の分析に使ったのなどは、その一例です。

林さんは、わりあいディストリビューション・フリーのテストを使うわけですよ。ぼくは後になってその理由がわかるような気がしたんですが、そのときはどうしてかと思いながらそれをやりました。

もう一つ、もっとこれは基本的なこと、林さんにはお話ししたことはないけれど、われわれ心理学者はまごまごしていると統計に食われちゃう。統計というのは魚を捕る網のようなもので、魚の運動性とか大きさによって網の目を変えたり、網の太さを変えるわけじゃないか。ところが、たとえば魚の運動性、魚の性質を勉強しているのは、われわれじゃないか。まごまごしていると、統計さんがそれまでみんなやってくれて、でき上がった網を、これを使えってことになる。つまり、われわれはまたテストの実施者になり下がりはないか。そういう話をしたことがありますよ。いまだにそれは強い印象です。これは笑い話でもあるけれど、そういう印象を統計について持ったわけです。ところが、後でちょっと申し上げますが、西平さんは受けたかもしれないけれど、進

学適性検査。

西平 ぼくは受けていない。(笑)

島津 済んでからですか。(笑) 進学適性検査の問題を研究所でつくっていたわけですね。そのときに慶応から横山松三郎先生がおいでになったんですよ。それで慶応の話聞くわけです。当時印東太郎君は来なかったんですが、横山先生が「印東は統計に淫している」「あんなことやっている、統計屋になっちゃって心理学は飛んじゃうよ」とおっしゃった。全く同感なんです。

西平 いや、ぼくも同感なんです。

島津 いまだに、そういう印象は強いんですね。ですから、皆さんと言語学の人たち、社会学、教育学、心理学の連中が一緒に仕事すると、すべて食われるかどうか知らぬけれど、食われる面はあるんじゃないですか。そういうことを感じますよ。どうですか。

西平 いや、統計屋の方は盲ヘビにおじずというところがあるかもしれないですね。それからというわけだが、「読み書き」をやっていたときは、みんなでよくいったけれど、パーソナリティが統計屋の連中はみんなアグレッシブだった。統計をやるためには、そういうのではなくてはならないかどうかよくわからないのですが、たまたまそうだったからじゃないんですか。

島津 いや、パーソナリティとしてアグレッシブだったという印象は全然ないけれど、仕事に対してはアグレッシブだったでしょう。心理学の連中はみんな非常に愉快に仕事させてもらったわけですから。これは皆さんもそうだと思いますが。

そんなふうにして、統計のことを勉強しましたが、そ

れがどういうところへ影響したかというところ、スクール・テストをやったでしょう。あの結果を梅津さんと私でまとめ、研究所の紀要の第1集としてまとめました。あれが文部省の意向(?)でばらまかれちゃったわけですよ。あれにみんな飛びついてきました。当時、学力低下が叫ばれていた時代で、ああいう方法でテストをつくらなければ、学力がいかにか低下しているとか、どこがどうなっているかがわかる。そういうねらいで、ああいうものをモデルにしてみねする傾向が、全国的に広がったんです。おかげでチンドン屋よろしく回りました。あんなことやっちゃダメですけど、そんなことがありました。あれは功か罪か知りませんが、事実ですね。

それから、われわれがそのとき感じたのは、異なった領域の学内が協力するということの初めになりそうだなということ、口にも出していましたね。学際的研究のはレリというか、こういうふうになっていけばいいのかなということはありませんでしたね。

あの当時、リテラシーが片一方にあって、もう一方では、研究所はほかに何もやっていなかったみたいです。ごらんになってわかったでしょうけれども、片一方でリテラシーをやって、もう一方で進学適性検査の問題の作成、ほかの研究面がまるまるとぼくられちゃったですね。進学適性検査も、大体同じような人間が関係しているわけですから、やっぱり問題をつくるときの吟味の仕方、プリテストの後の整理の仕方、そういうことについての統計的方法というものが、おかげさまでだいぶ変わりましたね。村瀬隆二君なんか主になってやっていたんですが、ずいぶん苦心しているんなことを考えていたようで

すが、いま考えてみると全く幼稚なことをやっていたんです。林さんたちが入られたんで、その点は非常によくなったんじゃないですか。

それと相前後というか、もうちょっと時期的にはおくれるんですが、そろそろ心理学関係の統計の本が出始めましたね。リテラシーが入ったのが1947年、1948年ぐらいに盛んになったんですから、それと相前後して、初めてそのころ出たのが佐藤先生の「無相関検定」ですか。あの本なんかずいぶん心理学の関係で読まれましたね。心理学者の仲間では、印東君、牧田稔君、肥田野直君の「心理学的測定法」が1951年に出ました。これが金子書房の手で、啓蒙的な役割りを果たしたんじゃないかと思いますね。岩原信九郎君なんかの本が出たのは、それから4〜5年後です。少し下って1961年には肥田野、大川信明、瀬谷正敏なんていう人のいまも売れている「統計学」の本が出たんじゃないですか。

この辺から、もう現在になるんですけれども、肥田野君は教育学部で統計的なことをやっていたと思うんです。青山博次郎さんがずいぶん手伝いをされていました。池田央君とか芝祐順君などは、そのときの学生でしょう。いまちょっと思い浮かぶことはそんなことですね。

心理学者のやっていることは、いまでもぼやぼやしているところ……という感じが強いのです。これは雑談になっちゃうけれど、いつか林さんがウサギの棲息分布を調べているということを聞いたことがあります。そのとき、ウサギはどこに住んでいてどう動くか、どう移動するか、どのくらいの速さで登るか下るか、それでこう網をかぶせるんだ。そうやっているのと、農林省か林野庁がなんか

知らぬけれど、そういう連中は一体どういうことをやるのかと思って考えちゃうんですよ。

西平 そのウサギの話はいいのですが、結局ウサギの行動というのは何にも研究されていない。それでウサギの行動まで、相当林さんも立ち入っていますね。そのときは別に統計学者じゃなくなっちゃっているんじゃないですか。

島津 実際問題としてあのときに、ここまでが統計で、ここまでが動物学者だ。てことはないと思うけれども、それでも、それでいいのかという感じはしますね。

西平 ただ、この間、林さんにこの関係でヒヤリングをやったときに、読み書き能力の経験を非常にいろいろお話しになった。あのとき、すべて疑わしいものを吟味テストでやったり、プリテストをやったり、いろんなことをやった。ところが、いまは全然やらぬじゃないか。統計学者もやらなくなっちゃったんですよ。だから、あのとき一緒にやった人たちだけ……。

島津 ちょっというのを忘れちゃったけれど、テストをつくったでしょう。スクールテストもつくりました。リテラシーの問題もそうだけれど、そのときに妥当性とか信頼性とかずいぶん細かく吟味して、それをこうやってとか、後からまたやりました。後からやってダメになったんじゃ困るんですが、そんな話もあったくらいで、やりましたね。だから、ああいうやり方は、もっと広げないといかぬですね。妥当性とか信頼性とか、お経の文句のような題目にはしますけれど、具体的にちっともやらないんですよ。あれ、やっぱりテストをつくる人が手を省くせいですね。

西平 それは統計をやっている連中もみんなそうなっちゃって、データ持ってこいということになっちゃっているわけですよ。

この間、やっぱりこの科研費でパッシンさんがちょうど来ているというので、やってくれたんです。パッシンさんは初めからいいかげんのことじゃいかぬ。吟味調査とか何とかを徹底的にやろうといったら、日本人はそれを受け入れてくれたと喜んでいましたね。ペルゼル憲法なんかも、いろいろそういうことが書いてあったと思うんですね。

島津 そうそう、ぼくはあのときペルゼルさんは偉いと思っていたけれど、いまにしてみると、あのときに、あれだけのことをいったっていうのは、ぼくはやっぱりさすがだと思いますね。

西平 パッシンさんは、この間聞いたら、文化人類学を出たんだそうですね。

島津 ああ、そうですか。

西平 あのときから後、国語研究所の人たちとやったみたいに、多面的にこう押さえていこうというあれは、もうなくなっちゃったみたいですね。

島津 そうですね。

西平 私なんか後からですけど、林さんなんかも、要するにいい人たちが集まってよくやったもんだと思いますね。

島津 そうですね。よくやりましたね。

西平 戦後、外林大作さんなんかアメリカに行ったんですか。

島津 行きました。

西平 戦争中？ そうじゃないですか。

島津 戦後です。外林君はアメリカへ行きました。彼は数理統計的なことに関心はありません。主としてパーソナリティの関係で。

西平 戦争中に、アメリカにたまたま抑留されていて、帰ってきたとてすぐとかって人は、心理学の方じゃ……。

島津 まあ、それに近いのは、抑留されなかったかもしれぬけれど南さん。あの人は浅間丸で帰ってきたんですね。だから抑留される前か、それぐらいじゃないですか。そういう人は聞きませんが、だれかいるかな。

西平 南さんは浅間丸で帰ってきたんですか。

島津 たしかそうですよ。南さんは東京高校なんですね。それで京都でしょう。戦争中は南の「ミ」の字も出なかった。南さんの名が出たのは光文社から「社会心理学」が出て、社会心理学ってものを縦に書いてくれた人というのが第一印象ですね。それから、あの人話がうまいですね。

西平 南さんもやっぱり東大を出たわけでしょう。

島津 京都。

西平 ああ京都ですか。ああ、そうですか。

島津 宮城音弥さんと同じですよ。宮城さんも東京高校で京都ですね。

西平 ああ、そうですか。宮城さんなんかは戦争中は……？

島津 戦争中に少し顔を出していましたが、ほとんど戦後ですね。だから戦前の昭和11年ぐらいまで——この間、心理学会で、50年史が出ましたが、昭和11年ぐら

いまでは宮城さんの名は出てこないですよ。50年史はまだもっとも前半だけですけれど、これからでしょう。

あと、統計に関して、ちょっといい忘れましたが、戦後、統計的というか数理的な研究に打ち込んだのは、印東君、岩原君、それから北大にいた田中良久君。田中君は東大へ来てからはコンピュータにこっちゃってね。そのくらいじゃないですかね。あと教育場面では肥田野君。そんなものかな。

西平 たとえば、経済学の方とは、多少、統計的なことで影響とか交流とかはないわけですか。

島津 ないですね。

西平 お医者さんの方とは……。

島津 ありませんね。研究的にはあるんですよ。戦前から、たとえば、東大の脳研究室へ行くとか、そういうことはありました。方法論を中心とか、ことに統計的な方法に関しての交流ということはないですね。たびたび申したように、統計的方法は心理学ではテストから入ってきたと見ることができるわけですが、研究法の中に入ってきたのは戦後といってよいでしょう。ただ最初のころは、結局データの後処理だけですね。計画の初めから統計的な方法で考えていく、後こういう処理をする。こういうことを出したいから、こういう方法で行くんだ。そういう使い方はかなり最近、20年以後でしょうね。結局、「統計をとる」という言葉のとおりで、いっぱいデータを集めて統計をとるという「とる統計」だったんですね。

しかし、さっきもちょっと触れたんだけど、心理学の人が教育学や社会学の人に比べて方法的に違ふとすれ

ば、結局ノツは数理的な処理方法にあると思います。まあ、心理学者はたたき大工だっていわれるかもしれませんが。(笑)

西平 このごろの大学の心理学では、統計的手法が講義に入っているわけですか。

島津 方法として独立して統計法とか何とかということのあるのは、わりあい少ないかもしれません。東大なんかは学生数が少なく、卒業後も心理学をやる学生が多いでしょうから、統計法なんていうんじゃなくて、おっしゃるようにノツノツの特殊講義の中でそういうことをやっちゃうんじゃないですか。立教では統計法といってる年から平均の出し方からやりますが、文学部の学生は数に弱いですから、統計で落とされるものは非常に多いです。

西平 いや、困っちゃうんですよ。ああいうのは、ほかの講義と違ってノ回途中で休んだら次がわからないですからね。それがほかの講義がわりあいにそういう雰囲気だから困りますね。

島津 文科なんかことにそうなんですよ。2〜3回抜けたって、つながっちゃうでしょう。だから、積み上げのないことが直接響かない学問やっていて、ああいうものやられると困るんですね。

西平 いや、教えていてもみんなそういう雰囲気だから困っちゃうんですよ。

島津 もうごく最近では、実験の初めからコンピュータを使う。動物実験なんかは刺激提示からね。刺激提示から始めて、それからもちろん結果の細かい処理まで。立教でも研究者はそうやっていますけれど、学生なんかはまだとても。

島津 ほかにどんな話をすればよいですか。

西平 統計を使うのと使わない心理学、もちろん要らない心理学もあるわけですね。

島津 ええ、ありますね。これはぼくのまとめですが、現代はゲシュタルト心理学と新行動主義の流れ、それに精神分析の影響と、この二つないし三つを大きな流れと見ると、これに対して第3勢力というのがあるんですね。これは西平直喜先生などもおっしゃる(?)人間性の心理学。これは現象学の影響を受けているんです。それが第3勢力だっている。主流はそんなもの見向きもしないんですけれどね。しかし学生の中には、零星的に何かわけのわからないことの方がおもしろいらしいんですね。あまり明快にやっちゃうと軽べつされたりしてね。

西平 戦争中には東大に匹敵するのは、高等師範系のところと、あと、やっぱり京都でしょう。

島津 京都は、戦争中、九州の矢田部先生が来られました。矢田部先生はゲシュタルトだと思いますが、言語とか思考とか、いわゆる高等精神作用、そういうものを研究された方で、特にフランスの文献に精通しておられた。統計的方法といったものも、それほど関心事ではなかったと思います。

というのは、こういうことがあったことを思い出しました。リテラシーで地方へ派遣されたでしょう。ぼくは白石さんと組んで京都へ行、たんですよ。京都では矢田部先生が主任で、あの地区のリテラシーの拠点だったでしょう。そのとき、ぼくの友人で京大の講師だった八木晃君がぼくらを訪ねてきました。白石さんに、動物実験

の結果の検定の方法について相談していました。だから、統計的手法みたいなものは、京都はそれほど進んでいたわけじゃないですかね。

西平 あとは東北ですか。

島津 東北はやっぱり遅かったんじゃないでしょうか。九州もそうでした。

いまはほかがよくなってきましたが、当時は、設備その他の点でも東大はよかったと思います。さっき話の出した心理学会の雑誌でも、昭和10年代は東大の卒業論文を出している雑誌、そういう感じです。このごろはそんなことは決してありませんが。

西平 京都には別に何かあったんじゃないですか。

島津 京都は別に「実験心理学研究」という雑誌を出していました。

西平 ついでにというとあれですけども、明治ぐらいの日本の一番初めの心理学者はだれなんですか。

島津 心理学者と名のつくのは元良勇次郎先生ですよ。東京帝国大学文科大学の心理学の主任教授ですね。そこに福来友吉助教授。福来先生は念字をやっていたんですよ。それで念字で失脚しちゃったわけ。

西平 江戸時代の学者で、きざっばい人が引用するというのはだれですか。

島津 知りませんね、あるんですか。

西平 ないんですか。

島津 あるのかもしれませんが。どうかな。(笑)

心理学、いや、まあ何学でもそうでしょうけれど、「心理」という言葉は何にでもくっついちゃいますからね。ネクタイの心理学、(笑) 頭髪の心理学、本当に困っちゃ

うんですね。それで何か聞かれると、常識以外のことは何もいえない。ちょっとそれらしくいえれば、ある意味ではやっぱり大したものですよ。本当にそう思いますね。何か尋ねられたときにちょっとしたことがいえれば、大したものだと思います。ネクタイの心理学でも何でもいいんだけど、話の中身に骨があるかないとでは感じ方が全然違っちゃうんですね。やっぱり勉強している人というのは何か出てきますね。話の中身に骨がないと、心理学者としては話にはずみがかからないんです。領域は違うけれど、たとえばおたくの皆さんとか言語学の柴田さんたちと話していると、はずみが話につくのです。ぼくはやっぱり何かあるなと感じるわけです。

西平 ネクタイの心理学はあれですけども、だんだん何か科学主義みたいで人間をコントロールする。そういう方向はどうですか。心理学を使ってやればできるものですか。

島津 そこが問題だと思うんです。

西平 たとえば、医学の方で男と女を産み分けるとか、やるやらぬは別として、それはできるんでしょうか。

島津 できるでしょうかね。心理学の教科書の「目的」のところに、「人間の行動を記述して、説明し、予測し、統制する」と書いてあるものがあるんです。最後の「統制する」というのは何事だというわけですが、「予測」するから考えれば、当然「統制する」ことはできるはずでしょう。しかし、実際問題として予測することだってなかなかできませんから、そうなれば統制などはとても。

西平 セラピーみたいなものは、統制？

島津 そうそう。セラピーは行動を変えることに主眼が

あると考えれば、当然、行動を統制することになるわけでしょう。だけど、セラピーは常識的なものが多いでしょう。理屈は少ないと思うんですよ。で、理屈は借りてきているわけ。たとえば学習の研究から理屈を借りてくると、患者を真正面から直角に左を向かせたいというとき、まず10度左を向いたらアメ玉ノッやる。さらに10度左を向いたらアメ玉ノッやる。こうして、結局直角に左を向かせる。これは行動の変容ですね。セラピーになるわけ。しかし、この考え方は借りものなんで、何も臨床心理学者じゃなくても、少し頭の働く者ならできるでしょうし、サルの曲芸を仕込む方法だと思うんです。

ところで、そうなるとどうなるか。究極的には行動の統制？になってしまわないか。ぼくは心理学ではそこまで行かないと思う。人間の尊厳といったことで規制されるんじゃないですか。

臨床心理学は、確かに行動の変容を目指していると思いますが、現実にはそこまで行っているわけでもないし、それほどには効果も上がっているわけじゃないかもしれないと思うんですよ。

西平 まじない程度ですか。

島津 臨床の人のいうことが常識だなんていわれるのは、やはりデータが不足していたり、理屈がしっかりしていないことによると思うのです。だから、そんなことは心理学の人が考えなくたって、だれが考えた、てわかるでしょう。そうすると、心理学でいう技術というのは何かということになっちゃうと思うんですよ。

西平 積み重ねの実験例やなんかのヒントがあるんじゃないですか。何かですぐ、何とかと何とかを注げばどう

なる。液体が化学反応を起こす。そういうことはいけ
れども、一般教養みたいな、そういう論理で。

島津 そうそう、一般教養ね。

西平 そういう意味で心理学的一般教養というのがや、
ぱりあるでしょう。

島津 いや、必ずしもそうじゃないと思いますね。だか
ら、魚をみんな統計さんにとられちゃうって。(笑)

西平 いや、すべていろんな考え方があって、心理学に
は、1つの専門的な考え方があるとぼくは思います。

島津 それはあれば大変いいことだと思いますよ。あ
ってしかるべきものだと思うけれども。

西平 ぼくは社会学の友達の方が多いいけれども、社会学
の方は全くそれが無いでしょう。特に大衆的な社会なん
かを考えれば、統計や国勢調査とどこが違うんだってこ
とになっちゃうわけですよ。

だけど、心理学の方は、大学で実験心理やなんかでも
ネズミをいじったりなんか、1つのあれがありますよ。
社会学の方はそれが無いわけですよ。

島津 それはそうかもしれませんが、おっしゃることはわ
かるんですけど、そのネズミの走る法則みたいなもの
はネズミの法則で。動物を使ってやるときは、それはネ
ズミの心理学であり、日本ザルの心理学だといえないこ
ともない。それは考え方によれば、一種の進化論的バイ
アスだと思うんですよ。

西平 極限に人間がいる。

島津 ちょっと暴論かもしれませんが、進化論的バイア
スですよ。そんなことはないかな。(笑)

西平 だけど、心理学はたとえば社会学なんかには比べれ

ば、やっぱりノつの古典的で、こう積み上げた方法があるでしょう。

島津 まあ、あるといえはあるかもしれないけれど、どうですかね。もっとも勉強している人はそういうことあるかもしれないということは考えますね。

西平 要するに大学なら大学へ入ってそういうトレーニングを、どこでも何か、ちょうど物理実験、化学実験みたいなこうずっと回ってやるというようなことあるでしょう。ああいう、何ていうか徒弟みたいなところを経ない。そういう点では、心理学は後進国でもあるでしょう。

島津 ありますね。

西平 それは、心理学ってものがノつの共通なものを何か持っている。

島津 本当にそうありがたいですね。

西平 それが形式化しちゃっては困りますけれども。

島津 そうですね。いろいろ断片的な思いつきで申しますと、心理学のいろんなこと、ほかの科学でもそうだと思うんだけど、きちとした、たとえば、心理学で「行動の法則」を考える。人がこういうときにはこういう行動をとるといいうとき、行動を規定するいろんな変数がありますね。その変数のウェイトを考えて、これはこういうふうに加算されたときにこういう行動を示すと、かりにしたとしますね。そのときに考えるのは、何かというと、数量的な表現だとぼくは思うんです。数量的表現がきちとできることを、少なくともかなりの心理学は目指していると思うのです。そういうふうなところまで行くのか。ちょうど物理学が力学みたいなもので考えて、それから数学的な表現に変えていくというようなことと

同じになっていくのかどうか。その辺が非常にむずかしいんじゃないかと思うんです。そこをねらっているんでしょうけれども。

西平 物理学の実験は条件をコントロールしてやれる。だが、地震だの天気予報みたいなもの、ああいうものはなかなか……。

島津 そういうことをきちっと考えていないと、地震のときのパニック状態なんていってても、物語を物語っているだけでしょう。あるいは現実にはどこかの地震を見てきて、それを復唱しているだけで、そこに何か考え方があっていっているわけじゃないと思うんです。

西平 だから、もっと頻々と地震でも起きれば、それを見ればわかりますけれど。(笑)

島津 そういうことかもしれませんね。

西平 職業適性検査みたいなものはどうですか。

島津 あれがまたむずかしい問題をばらんでいるんですよ。この間も、ある学校で新生に一齐にパーソナリティのテストをやりたいがどう思うかって聞かれたんです。そんなことやめた方がいいと申したんです。

西平 学校じゃ、心理学の先生なら喜ぶと思った。

島津 テストをやって、学生を何とか型とたとえれば分けちゃうと、今度はその何とか型が一人歩きしちゃうと思うんですよ。そうになると、話が逆になりかねないで、あの学生は何とか型だからこういうパーソナリティなんだということになるんじゃないか。

適性検査も注意深くやらないと同じことじゃないかと思うんですよ。適性検査をこうやって見ていてやらせて、ああいうところは間違えるのかなとか、あそこは曲がっ

ちゃうのかなと個人的に対応しながらやっでいけば、よくわかると思うんです。だから、適性を見るのに適性検査じゃなくてもいいんで、カンのあけ方でもいいと思うんですけれどもね。そういうことをやらせて、その行動を観察していて、いろいろ考えながら、こっちに曲がったから、こうじゃないか、それじゃこれも同じようにやるかなとか、そういうやり方をしてみる必要があると思うんですよ。多人数をこなすための適性検査は注意して使わないといけないんじゃないかと思うんです。

この又割ぐらい受け売りなんですけど、梅津さんがいま久里浜の国立特殊教育研究所で目の見えない、口がきけない、そして知恵おくれの子供の研究をしているんです。テスト使わないっていうんです。自分はテストなき心理学をやるんだといっておられる。ぼくは全く同感なんです。

そういうときに、やっぱり自分で考えながら、1対1の対応でそういうふうにしていて、その積み重ねが最後にテストになりやな。たって構わない。

西平 梅津さんがそういうことをやるのも、心理学の教養があるからやれるんじゃないですか。

島津 それはそうだと思うんです。ですから、そういうふうによつて、それを何かの形で一般化できるものかどうか、そこが問題だと思います。もちろん、一般化できるんじゃないかと思ひますけれどもね。そうやっでいけば、たとえば重障害の子供が、何かの形で反応ができるとかいうことになつてくるだろうということでもいいんじゃないかと思うんです。

西平 この間、ある大学の林学の先生が来ていっていま

したけれど、林学に入ってきた学生が「じゃ、演習で山へ行こう」といったら、「私は山歩きはきらいです」というんです。「なぜお前入った」といいたら、「お前の偏差値だ。たらこの大学の林学科ぐらいが適当だといわれたから入ったんです」と向こうは平気な顔をしていうんです。(笑) それで、その先生は「東京農大なんかは山持ちや何かの息子が来ている。これは初めから山をやる気でいるんだから、東京農大の先生はいいですよ」といっていましたが、本当にそういうふうになっちゃったんですね。

島津 大学の学生相談所へ新入生が相談に来て、「ぼくは偏差値が幾ら幾らだから、何もこの学校に入らなくて、同じく私立なら慶応へ入れたわけだ、一体どうしたらよいでしょう」と相談に来るんですよ。(笑)

林さんなんか、先生は講釈だけしていればいいとおっしゃるかもしれぬけれど、本気にやると、これはなかなかそうはいかないですよ。

西平 いや、ぼくなんかちょっと早稲田へ行。て、ゼミで20~30人持。ていても、1人ぐ。らいは必ず落ち込。んじやうのいますね。それがちょっとした一言で浮かび上。が。たりしますから、何かしてやりたいと思う。よけいなお世話かもしれぬけれど。

島津 ぼくも立教で、そういう方法でや。てきました。それが教育的かどうか……。

何かいろいろ申し上げましたが、全く支離滅裂にな。て相済みません。

西平 いや、どうもありがとうございました。